

Patent attorney

私の目指す弁理士像

• No. 93

会 員

正 林 真 之

このコラムが始まった8年前からずっと会誌委員(パテント編集委員)をしているが、このコラムが始まった頃は、かなりの人が、いわゆるスーパー弁理士になりたいというようなことを書いていたような気がする。スーパー弁理士というのは、要するに、法律も語学も技術も、更には弁理士の業務に関連することは何でもござい、というような弁理士のことである。そしてそのスーパー弁理士になるためには、大学院に行ったり、ベンチャー企業とも積極的に付き合ったり、または留学したり、というような特別な努力をしなければならぬというようなことが書かれてあり、そしてそれについて、あえてそのような苦勞をすることによって、是非とも立派な弁理士になりたい、というような記述も見られていたようにも思う。

しかしながら、最近になって、そういったスーパー弁理士を目指すようなことは少なくなり、いわゆる顧客満足度を高めるために、サービスの質の向上や顧客のニーズを的確にキャッチするための努力を優先させる、といったような弁理士像が多く見られるようになってきている。当然のことながら、「顧客に嫌われてもいいし、また理解されなくてもいいから、自分が納得できるような仕事を完遂できる、といった感じの職業人生を送りたい」というような硬派なものは見られなくなってきている。だからといって、硬派でなくなったのが非常に嘆かわしいというものではない。むしろ、顧客にとって使いやすい弁理士が増えるというのはよいことであるように思う。これはつまり、従来の「弁理士のために顧客はある」というような発想から、「顧客のために弁理士が存在する」というような健全な思想に移り変わってきたことを意味し、サービス業という観点からしても、非常に好ましいことのように思われる。

それでは、ここで記事を書いた人というのは、今現在どのようにしているのでしょうか。これについて、詳しく追跡調査をしたわけではないが、私の記憶の中で思い当たる幾人かの方々というのは実際に、ほぼこの「私の目指す弁理士像」に書いた通りの方向に向かって進んでいるように思われる。すなわち、スーパー弁

理士になりたいと思っていた人は、それなりの修行過程を積んでいるように思えるし、そしてそのいくつかはある程度成就しているように思われる。この一方で、サービスマン的な弁理士になりたいというように書いた人は、それなりの顧客を獲得し、事業を拡大しているようにも思われる。これはやはり、「自分の願望を実現するための方法」というような本によく書かれているように、「文字にしたものは必ず実現する」ということの現われかもしれない。であるから、自分の夢を実現したり、または自己実現を図るためにも、ここであえて自分の希望を文字にして、周囲の皆に宣誓し、なりたいたいような自分になる、というようなプレッシャーをかけるのも、夢実現のための有効な手段なのかもしれない。

例えば、かく言う私がかつてここにどのようなことを書いたかということ、それは今から約6年前の、事務所設立後1年も経たないような頃であったのであるが、「弁理士になりたての人がとりあえず目標にすることができるような、小さな模範弁理士になりたい」というようなことを書いていたことを覚えている。あれから6年経った今、そのようなことが果たして実現されているかどうかについては、その客観的な評価は自分で行くべきものではない。周囲の方々の中には、その半分も実現していないと評価される方もいれば、100%以上の実現をしていると認めて下さる方もいるであろう。

こうしたことから、もし私を見て「それなりの効用があるのかもしれない」と思われた方は、ここで一発、この「私の目指す弁理士像」に何らかの記事(抱負)を書いてみるというのも良いのではないだろうか。それが大志であればあるほど良く、そうしてくれるほうが、このコラムをあえて設けた創設者の意図にも沿っていると思う。

ちなみに、今の私の目指す弁理士像というのは、「発明者や従業員の皆さんの長所や能力を十分に引き出し、存分に発揮させることによって我が国の知財業界の活力を高めることができるような弁理士になりたい」というものであり、今回の原稿執筆はそれを実現するための一歩であるとも言える。